

一枚の古写真から——部局史編集の一断面——

飯 田 修 一

はじめに

一、「古写真」の発見、東京大学物理学科最後の外国人教師、C・G・ノット

二、東京大学創設期有力教授、外山正一・菊池大麓・山川健次郎

三、長岡家、茅家、東京大学理学部と「古写真」とのつながり

四、異色の物理学教授・北尾次郎、準助教授・酒井佐保

五、わが国に献身した英語教育第一人者W・D・コックスとその一家、国際社会

六、寺尾寿教授・三輪桓一郎助教授、仏語物理学科の流れ

七、おわりに一言、歴史から汲み取る教訓と東京大学アーカイヴズへの支持

註及び文献

はじめに

昭和四十九年十二月、物理学教室より百年史編集委員を指名され、更に同五十二年五月、前任の江上委員長が理学部評議員に就任された

一枚の古写真から

後を受けて、理学部百年史編集委員長に任命される事情が発生した。

物理学は少年時代以来の趣味でもあり、少しは人前に出せる文章も書けると考えている。しかし歴史についての知識や文才の全くない筆者が、こうした大役を仰せつかったのは、昭和十九年十月郷里神戸市灘区を離れて入学以来、一貫して東京大学を離れることのない履歴と年令の偶然のしからしめるところである。しかしながら幸い理学部各教室・施設の歴代編集委員とその協力者、理学部事務室の諸君、全学編集室、私共の秘書、その他の御協力によって、昨年六月に全原稿が完成した。なお、各教室・施設等の内容の主要部分の責任は、各教室・施設などにあり、委員長はまとめ役に過ぎないことはお断りするまでもないことであろう。

翻って考えると、元来理学の中で物理学は、数学に次ぐ厳密科学であるが、数学と異なり、現実と直面した場合、場合により多少の妥協も許して実行せねば結果が判らないという点がある。この事情は歴史という、厳密性を要するけれども、しかし完全に厳密性を追跡するこ

帝国大学理科大学物理学科最後の外国人教師C・G・ノット

帰国記念写真人物名対照図〔於物理学教室玄関前〕

日時 明治24年(1891)6月18日



一枚の古写真から

とは不可能である、と云ったその性格と、ある程度の類似が有ったように思う。こうした事情のもとで、すぐに判ったことは、委員長としての責任を持つためには、十分執筆できる位の老大な知識が必要で、その知識を得るためには、各種資料の一読その他、同じく相当の時間を使わねばならず、その結果、物理学科と、理学部の全体に関する総説や資料の原案は、殆んど必然的に私が作成することになるという事情であった。

れの分野に専門家が居られる訳で、その中で東京大学の現役、もしくは現役に近い教官が、努力して作成する百年史に意義があらうかという疑問も生じたが、実働の研究・教育者と、史実に十分な学識のある歴史家とが両立しないことは明白で、従って、逆にむしろその点にこそ、この百年史の意義があると考える立場を取ることにした。結果論ではあるが、東京大学の教官が東京大学の歴史を調べ書くという地の利や、相当の経費を使用する東京大学全体の組織的活動の一環である

といった、今迄の歴史家の人達の持たない相異が加わって、独特の深みのある百年史であり、又、従来の定説と異なる捉え方を加味する結果になった場合もあるように推定する。

なお、幸い委員長の業務上、方針や枠組みの作成だけで相当の労力を必要とし、従って、担当部分に関する具体的な執筆、推敲は、他の理学部各教室・施設の原稿の一部到着を待って後行方針を取らせて戴くことが出来て、思ったよりも遙かに楽しく、着実に理学部百年史を完成させることが出来たように思う。ただし、歴史には常に考古学的な研究が必要で、その為には時間が無制限に要する場合があり、こうした際に歴史が本務でない教官の立場として、私自身もある程度で止めざるを得なかったし、理学部の他の執筆担当の方々も同様の事情と推察する。なお、「事實は小説よりも奇なり」という言葉があるが、歴史的な事実の確認は、確かに、物理学的厳密性が必要で、〇・一％でも残る可能性が、まさに実現している場合もあり、改めて、歴史の示す真実のユニークさに感銘する状況が、いくつか現れ、とくに本解説の人物同定に関して顕著であったと思う。東京大学理学部百年史の場合、その各部分の多くに就いて、歴史に興味を持った各分野の人達の説明や記録が、既に多方面に存在して居たのであるが、場合により、それらに存在した僅少な誤まりを指摘訂正する事が有って、従ってこの点に就いても、歴史の記録として、恥づかしくない水準に到達したのではないかと考える。この小文の中にも読者がそうした事実の存在を感じ取って戴ければ幸いである。とくに文章の上ではたった一語、もしくは一行であっても、それをどのように書くためには、何日にも

及ぶ資料探索の足労と考究活動の必要な場合があり、この小文が、百年史編集室の人達や、全学の執筆分担者各位の苦心の一端を理解して戴く上で、何等かの寄与をして戴ければ幸いである。しかしながら、常識として、オリジナナルな歴史の記録には、ミスや誤解などが避け難いので、それらが発見された場合、とくに筆者の執筆部分に関しては遠慮なく御一報戴けることも、合せて希望させて戴きたい。

一、「古写真」の発見、東京大学理学部物理学科

最後の外国人教師、C・G・ノット

さて昭和五十九年前後から、部局史に挿入する歴史的な写真という課題に直面した。最初は理学部教授会の皆様方の御知恵を拝借すれば、六ページ程度の写真を集めることは造作ないであろうと考えたが、それ程事情は甘くないことが、すぐに判って来た。物理学教室や理学部教授会にお願いをしただけでは余り資料が集まらず、やや焦燥感を持ち始めた頃、物理学教室の後輩である山本祐靖教授から、自分の手許に一枚の古い写真があるという伝言が入って来た。内容は判らないということで、最初は大した写真ではあるまいと考えていたが、昨年始め、何わとも見るに如かずということで、とくに強く御願いで持って来て戴いたのが、本号口絵に掲載された一枚の「古写真」である。この「古写真」の最初の姿はクルクルと強い巻き癖がついて円筒状になって居り、直径が二センチ位で、長さが二十数センチメートルの何とも貧弱な巻紙に過ぎなかった。廊下の片隅のごみ箱の中に捨ててあったとかで、最初は台紙があったが、台紙を剥がしたとこ

ろ、時間と共にこうした姿になったとの事であった。

中央に、可成りの威厳のある外人が立ち、周りには教官・学生が集まっていた、「いわく」ありげな「古写真」であることはすぐに感じられたが、初めて見た時点ではそれ以上のことは何も判らなかつた。

しかし、数日後最初のブレイク・スルーがなされた。『長岡半太郎伝』⁽¹⁾を繙いて、「古写真」の登場人物と『長岡半太郎伝』の写真の人物を照合するうちに、長岡伝の冒頭写真集中その第二頁に掲載された長岡半太郎若かりし頃の写真は、まさしく同「古写真」から拡大・複製されていることが発見されたのである。そして、その下には「一八九一年六月一日ノット帰国記念写真より」と説明があった。これはツタンカーメンの秘宝の発見程ではないにしても、理学部百年史編集委員長としては、胸がときめく発見であった。そして、その後、次第に解読された事実によって、この「古写真」は、当時の工科大学教師バルトンによって撮影され、明治中期の理科大学（理学部のこと）⁽²⁾⁽³⁾、更に帝国大学の全容に及ぶ、素晴らしい構成を持った、記念すべき写真であることが判明したのであった。

一八九一年は明治二十四年であつて、明治十年に創設された東京大学は、明治十九年、神田地区より本郷地区への移転が完了すると共に、帝国大学と改称して学制を一新した⁽⁴⁾。そしてC・G・ノットは帝国大学理科物理学科所属の最後の外国人教師であつて、この写真は、長岡や田中館ら⁽⁵⁾が「赤ひげ」と呼んだそのノットが、八年近くに亘って勤めた東京大学を後にして、母国スコットランドに向けて、まさに帰国しようとしている姿を示していた。⁽³⁾英国に留学した田中館

愛橋教授は、既に帰国の途上であり、翌月七月には帰朝して、ノットと交替することが、この時点で既に予定されていたのであり、その左手に巻かれた喪章は、当時、永久帰国の際の習慣か、あるいは近親に不幸があったのかは判らないが、その離別を更に悲しいものにさせている。しかし、この日より、わが物理学教室は、外国人教師の手を離れて名実共に独立したのである。今日現在、フランスが徴兵適齢期の知識層若者を、その希望により、開発途上国に派遣してその教育を援助している事情と幾分の類似性を持って、最初仏人物理学教師達により開設された我が国の物理学科教育は、寺尾寿教授に代表されて、形而上学である星学にその後の育ちが見られたが、東京大学にはそれ以外の発展は残らなかった。そして、その後、差別の存在を尊重する伝統的な英国の政策の下で、その実力相応の研究と教育の機会を望んだ、ユイニングその他スコットランド系の物理学者と、開拓者の精神を持つメンデンホール他米国籍物理学者などによって、実験を重視する実証的な正統派物理学が伝えられ、今日に列なる我が国物理学の本流を形成して行ったという経過がある。この歴史を象徴するかの如く、そのスコットランド系の、最後の外国人教師ノットが、わが国を去ろうとしている状況が示されているのである。

二、東京大学創設期有力教授、外山正一・菊池大麓

山川健次郎

さて筆者は物理学の上で、未知の構造や知識などを模索、発見、確

認するのに相当の経験がある。また、忘れ物、失い物の発見についてもかなり得意な方である。幸い実験物理学者なので、普通の人がありそうにもないと思うことが、物理学的には可能であって、実際に起こることを何度も経験して居る。従って、普通の人が「神かくし」と呼ぶようになるような状況も起こり得るし、又その場合でも発見出来るという自負がある。もっとも、これは反面、よく物を忘れたり、失ったりするということ、自慢にはならない。しかしながら、この「古写真」中の人物の同定には、こうした裁量がある程度役立ったように思われる。むろん、こうした際に、東京大学百年史の全学編集委員会と百年史編集室の御努力によって造られた東京大学全体に関する記録、例えば通史一、二、三、資料一、二、三、更に部局史一などが、非常な助けになったのであるが、加えて永年に亘り百年史編集室に勤めて居られる小川千代子さんの御協力は大変有難かった。物理学・数学・星学などの関係者に就いては、理学部の資料もかなり在ったが、とくに同定の初期段階で、その最前列の四名中、最後に残った一人、向かって左端の人物が、文科大学（文学部）教授外山正一であることを目で小川さんが指摘されたことには感激した。こうして、最前列は右から、山川健次郎、ノット、菊池大麓、外山正一であることが、まず判明した。

山川健次郎は当時物理学科の筆頭教授であり、元会津藩士で、白虎隊生き残りと言われ（若年で外された）、薩州黒田清隆などにより、とくに選ばれて米国に留学し、帰国して物理学科初代教授となり、管理能力に秀れ、後に理科大学長を勤め更に（東京）帝国大学総長に、

二回就任する人物である。菊池大麓は数学者であつて、学問的にも、又管理者としても秀れていたものと考えられ、約半年山川より年下であるが、当時理科大学長を勤め、また山川より一代先に総長に就任した人である。⁽⁶⁾又外山正一は初代文科大学長として、当時もその職にあり、英語、論理学、心理学によつて、理科大学学生の教養学科相当の課程を明治十年代に兼担して来た人である。明治十年、二十年代は、今日に比較して、語学、従つて文科大学の比重が高く、明治十九年には既に筆頭大学長(筆頭学部長)として東京大学総理事務取扱・総長事務取扱を勤め、更に明治三十年、菊池よりも更に一代先に総長に就任する人物であつて、全員中最高の立場にあるものと推定できる。なお、外山正一、菊池大麓は、幕臣子弟より選ばれて、慶応二年十月、英国留学に出発した十二名の中に在り、当時それぞれ十八歳と十一歳であつた。菊池は明治三年より再び英国に留学し、ケンブリッジ大学で数学を専攻、優秀な成績で卒業し、外山は明治五年更に米国に留学し、ミシガン大学で哲学・理学を修め、化学科を卒業した。前列二番目、最初の段上にある人達は、その特徴から数学教授藤沢利喜太郎、物理学科大学院研究生鶴田賢次、それから先述の物理学科助教長岡半太郎である。ここまでは私と前記小川さんとの協力作業で順調に進行し、確定することが出来た。続いて意外な事実が、次々に判明してゆくことになった。

三、長岡家、茅家、東京大学理学部と「古写真」とのつながり

さて、『長岡半太郎伝』は、少なくともこの写真の一部を、使っているのだから、今一枚この「古写真」と同じものが現存する可能性がある。そこで、その筆者の一人木村東作氏に尋ねたところ、長岡半太郎教授の遺品が数多く国立科学博物館に保管されていることが判り、多くの貴重な写真が見つかると共に、まさしく本「古写真」と同一の写真も発見されたのであつた。さらに木村東作氏から、既に十数年以前に、坪井誠太郎名誉教授(理学部地質学教室・故人)の協力による人物同定の努力があつたことを知らされ、この時点で、前から数えて第四列目の、左から二番目の人物が、四年後星学教授となる平山信であり、同じく同列、ノットの右上の人物が、日本を代表する地震学者となつた大森房吉であつて、何れも大学院研究生の立場の姿であることが確定した。これらはいずれもわれわれの予想の範囲内にはあつたが、決り手に欠けていたものであつた。なお木村東作氏から、氏は旧東京物理学校(現東京理科大学)の出身で、その前身東京物理講習所は、明治十四年、前記のように主流ではなくなつた伝説物理学科卒業生達によつて、物理学を一般に普及する目的で設立され、前記寺尾星学教授は、その初代校長であることを知つた。

つづいて木村氏から、大森房吉の右隣りの同列の学生が、木村栄らしいが、決り手に欠けること、又私も予想していたことであるが、最後列右から二人目大森の右上に居る若い学生が、後に物理実験学教授に成長した中村清二ではなからうかというのを伺つた。

さて、長岡半太郎、本多光太郎、木村栄は、物理学に関連して、第一回文化勲章を受賞した人達であり、いずれもわが理学部(理科大学)

の出身者である。長岡半太郎はわが物理学教室の百年を代表すると言つてよい教授であつて、長岡の原子模型は有名である。本多光太郎は東北大学金属材料研究所（金研）を創始し、鉄鋼の研究で卓越した業績を上げ、又、木村栄は岩手県水沢にある緯度観測所の初代所長として、地球の地軸の運動におけるZ項の発見者である。ところで、東京大学創立百年記念事業後援会会長、元総長、理学部名誉教授、茅誠司氏は、私の恩師であり、又前記東北大学金研の出身で、本多光太郎教授の高弟であり、更にその奥様が、木村栄博士の長女である。そこで早速茅家を訪問したところ、御父様の面影があり、間違いないということになった。又、中村清二氏は叔父様に当たるといふことで、これも間違いなからうということになった。更に、この写真には見覚えがあり、父の遺品を整理した際、東京大学関係の写真ということで、東京大学理学部に寄贈した記憶があるというのである。このお話は私の予想を逸脱した展開であつた。しかし、これで一つの謎が解けた。東京大学理学部として、もし、明治二十四年以來の保存であるなら、そんなに粗末に扱われることはなかつたであろう。ところが、途中で素姓の判らない写真として持ち込まれ、何代も事務の人達が変わつて、申し送りが完全に消失したと臆測される。従つて、推定された以上の経過は、古い重要な資料が、時代と共に喪失してゆく過程の典型的な一例を示したことになり、幸か不幸か百年史記念事業は、その従来の自然の摂理にストップを掛けたことになつたと云える。

四、異色の物理学教授・北尾次郎、準助教教授・酒井佐保

以上で、わが国の代表的な物理学史研究者木村東作氏の疑点解消までは済ませたことになる。しかし、第三列の人達の同定は全く無く、そこに少なくとも二人の人物が重要である可能性が考えられた。その一人は、ノットのすぐ左後に立っている人であり、背は低い、年輩で威厳あり気な容貌の人物である。この人物に対し、同定と消去法の両面から探索が続けられ、その結果、百年史本部編集室手持ちの資料写真に存在する北尾次郎の唯一の顔写真を有力な根拠として、力学担当教授北尾次郎ではなからうかとの推定が成立したが、決め手に欠けた。山川、ノット、北尾は当時の物理学教室の三教授であつて、当然出席してよいと推定されたが、北尾は農科大学（農学部）教授が本務で理学部は兼担であることと、顔写真の特徴に今一つの疑点が残つたのである。この同定にはその後更に重大な反証が現れた。前記長岡教授の遺品の中に、今一枚多少老朽不鮮明化した葉書大の写真があり、問題の写真と同日に藤沢教授により撮影されたとの記録があり、更にその十九名の人物全員に就いて、ローマ字による同定が、なされて居たのであつた。この同定から、その写真は、問題の写真中の山川を除く物理学科教員全員と、ノット、更に学生諸君の殆んど全員より成つて居り、長岡、鶴田、大森、木村栄の同定に関しては完全に一致した。しかし、その写真の裏面に書かれた英語名は、表面おもての写真に対し、左

右が逆で、且つ90度回転してペンで記入され、更に上部の約半数の人物に關して位置關係が不明瞭で、対応が必ずしも容易でない狀況があった。種々考察した結果、そこに記入されている名稱は、二名位を除いて、他はすべて当時の学生、研究生の名簿に対応する名前があり、信頼度は十分に高いものと予想された。そこで前記中村清二などを同定の鍵として、この英語名と、表の写真との対応を取った結果、この記録は、問題の「古写真」で北尾次郎と私共が考えた人物をS A K K A Iと記名していることが判った。既に判った対応關係から、この人物は物理学科に対応する名前がなければならない。S A K K A Iと呼ぶ人物は従って、明治十六年七月物理学科卒業の酒井佐保^{すけほ}ではなからうかと推定された。資料調査の結果、酒井佐保は明治十七年、ノット在籍時に準助教の立場を短期間得て居り、明治二十七年第三高等学校教頭、続いて第六高等学校初代校長、更に第三高等学校校長を歴任した人物であることが判った。その六高時代の写真が、駒場教養学部図書館堀内さんの努力で得られ、一見したところ頭の禿げ具合や、顎髭の感じなど、前記「北尾」と考えた人物が、年代を経た場合に予想出来る容貌の範囲内にあることを示していた。一方この六月の初め、小川さんが、『明治過去帳』⁽¹⁰⁾より北尾次郎の項をコピーして来られた。北尾は松江藩士の後裔で、明治三年医学關係である大学東校より十七歳で独逸に派遣されたことまでは知っていたが、二十六歳でゲッチンゲン大学のドクトルの学位を取り、ピアノの名手と記せられたドイツ人夫人を持ち、ピアノを弾き、更に問題の時期の直後である明治二十四年八月、帝国大学理学博士の学位を受けたことが判ったのである。こ

れで六月の時点で、東京に在籍し、出席の立場であったことに疑いが無くなった。北尾は明治二十五年、一人で一年間に六編の物理学原著論文を東京数学物理学会記事に発表し、ドイツ語で小説を書いたこともあるといった才能ある人物であって、理論物理学に關し、明瞭に山川より上であつたから、(長岡は若年の助教であるが、理論物理学に關しても、素晴らしい才能を示していたと記録される。)北尾の学位論文を実質的に審査できるのは教授ではノット、菊池と言つたところであらう。従つてノットの送別会には、常識的には出席の立場にあつたと予想され、丁度ノットと交替するかの如く、ノットの後ろに立つのは、十分に自然であると推定されたのであつた。学位の授与が八月であり、問題の時点は六月十八日であるから、学位授与内定の前から微妙なところである。

以上状況証拠は容貌を含めて北尾に有利であるが、長岡の遺品の中に酒井と記名があり、酒井の容貌は十分に似て居るという事情が発生したのである。筆者は種々の考慮の結果として長岡の遺品の記名は長岡半太郎によるのではなく、従つて完璧でない可能性もあり得ると先づ推定した。その根拠として、他のすべての長岡半太郎の写真への裏書きは、長岡特有の達筆の崩し漢字で、かつ年代を示して、黒茶がかつたインクで書かれ、左右逆転は同様であつたが、90度の回転は無かつたのである。更に問題の記入はライト・ブルー色の英語記入であつた。ライト・ブルーは昭和期のインクの特徴と推定され、少くとも明治年間のものでは無いと考へた。こうして、信頼度の非常に高い英語の裏書きは、こと北尾の同定に關しては誤まつているのではないかと

推定⁽¹⁾した。この場合、決め手として、いわゆる顔のフィーリングが酒井の後年の写真よりも北尾に近いこともあるが、更に北尾の唯一の手掛りである明治三十三年頃の写真では、北尾は日本人には珍らしく鼻の輪郭^{じぶた}の彫りの深い人物で、鼻眼鏡が使用されて居り、その特徴が、「古写真」に現われて居り、それは酒井の後年の写真の特徴とは異なり、耳の特徴も北尾と一致の範囲にあると推定されたのである。更に「古写真」中の人物は、集団の中央に相当の威厳を持って立って居り、酒井佐保は、若し居たとしても、当時物理学教室では、客員相当の立場なので、礼儀作法の厳格な封建社会の残渣のある明治中期の帝国大学の中で、占めることの出来る位置ではないのではないかという推定も、小さくない因子となった。もし、酒井でないとした場合、顔の特徴その他から、他の可能性は無く、北尾に決定する。こうして北尾次郎教授という推定が当初成立した。これは昭和六十一年七月の時点であって、理学部百年史脱稿後の事であり、その形で百年史写真脚注原稿は本部に提出された。しかしながら、ドラマは更に展開することになった。筆者等は毎年夏、茅誠司先生を囲む学際シンポジウム茅コンファレンスを開催しているが、その常連の一人、岡真弘島根大学教授は、松江藩ゆかりの人であって、北尾次郎の名を承知して居り、その親戚筋も承知しているとの提議があり、筆者の要請を受けて、「古写真」の複写コピーを持参し、確認の事を引き受けて帰られた。しかし、その後、連絡の全くない状況となった。ところで筆者の磁気学分野の後輩に酒井佐芳という友人が居る。学習院大学物理学科の出身で、現在富士通研究所勤務である。名前に佐の一字があること、学

習院出身であること⁽¹²⁾、を頼りと考え、昭和六十一年十一月、金沢での応用磁気学会に際し、偶然ホテルを同じくし、朝食に際して尋ねたところ、驚くべきことに、酒井佐保は祖父であり、当時の写真も保存があるとの答が返って来た。同年十二月十九日明治ゆかりの渋谷二葉亭に於て、明治十一年以来の古写真を数多く拝見すると共に、問題の人物は粉れもなく酒井佐保であることが確認された。これは百年史写真脚注が、組版中の出来事であり、間一髪正解に到達したのである。これらの写真から、酒井佐保氏は、写真撮影の際に、好位置を占めることの多い人であり、「古写真」中の位置は、真中ではあるが学生諸君と同一の段であって、先述の身分と写真位置とに関する筆者の推定は、全くの過まりであったことも認識されたのである。鼻筋の彫りの深さも、年齢と肥満度、更に写真自身の技術的変差によって変化し、決め手にならないことが、結果的に判ったのであった。

しかし、それでは北尾次郎はどうなのか。他の人物に対応があるかどうか、その謎はこの段階では解けない。それらに就いては更に後程触れる。なお北尾次郎の当時の推定年齢は三十八歳である。

五、わが国に献身した英語教育第一人者・W・D・

コックスとその一家、国際社会

次に考えるべき有力者は、酒井の右側に並ぶ外人風の人物である。酒井を北尾と誤認していた時点で、この人物は英国人、W・D・コックスではないかとの予想が立った。明治二十四年六月の時点で、東京

に居て理学部と関連があり、かつ既に顔写真のよく判っている理学の専門教師以外の外国人の数は多くない。とくに明治二十二年に撮影された帝国大学全教官の写真には七名の西欧系外国人教師が見られ、その中にノットも撮影者バルトンも含まれて居るにも拘わらず、問題の人物は居ないのである。従つて残る可能性は極く少数であり、その中でコックスは、明治十六年、ノット来日の時点で、理科大学職員表の教授及教師欄に、英語の教師としてノットと共に名前を列ねたという点で、記録の上に明瞭な関連が存在する唯一の人であった。

百年史編集室中野氏の御協力その他によって更に判ったことは、コックスは当時、わが国第一の令名のある英語学教師であつて、一八四四年ロンドンに生れ、オックスフォード・ハウス学校の校長まで勤め、明治九年、三年間の契約で駒場農学校の英語教師として招備され、明治十二年東京大学予備門の発足と共に予備門に転じ、その雇形式の儘予備門は明治十九年第一高等中学校に、更に明治二十七年、第一高等学校に移行して東京大学を離れる。予備門は法規的にも東京大学附属であり、第一高等中学校は制度上は東京大学と独立であるが、少くとも第一高等学校移行までは、実質的には東京大学附属と言つてよい立場で、現在の教養学部に近い役割を果していた。⁽¹⁵⁾ コックスさん⁽¹⁴⁾はその中で、東京大学学生の英語教育に、特別に才能のあるユニークな外国人教師として活躍し、とくに明治二十二年七月以降は第一高等中学校及び第一高等学校に於て筆頭英語教師の立場を維持したことが記録される。コックスさん⁽¹⁴⁾は英語の教授方法が異例に旨く、日本人学生のため十指に余る英語教科書を著作し、勤勉で、かつ、

いわゆる物欲のない人で、当時のわが国の社会に厚い信用を得ており、明治二十四年は四十七歳に当たるが、五十四歳の時に勲四等瑞宝章、六十一歳の現役で生涯を終えたとき、旭日小綬章を授けられている。また、いわゆるプロフェッサーのような型ではなく、その住家の脇に掘立て小屋のような建物を作つて、ボール・ルームと称し、ダンスや、又バイオリンなども弾かれたソーシャル・ミーティング、プライベート・アマューズメントを主催し、我が国に、こうした交際方法を導入した最初の人ではないかと記されている。⁽¹⁶⁾

さて、教養学部資料室などの御協力によつて手許に得られたコックスの写真は、すべて十年余後の相当に老けた年代の写真であつて、「古写真」中の若々しい人物と一致するか否かは微妙なところにある。しかし体格が良いということ、豊富な顎髭は良く一致している。更に、眉毛の特徴が一致する。「古写真」中の外人の眉毛は東洋人風であつて、眉毛と眼の間に距離がある。これは当時の外人教師の顔写真には非常に珍らしい特徴であつて、それが一致しているのである。又、薄汚い鞆を何時も持っていたという点も、極く一致する。「古写真」中の人物は左手の後下に、何かを隠し持つて居り、その縁取りから、ポストン・バック状の鞆の可能性が伺えるのである。なお否定因子もある。晩年のコックスはビール腹であつたといわれるが、その面影はこの「古写真」の人物にはない。しかしながら、そういつた人物であれば、明治十六年、初めて来日したノットを最初に家庭で暖かく迎えたのはコックス夫妻であつたらうし、理学部の正規の教官でなくなつてからも、外国留学の経験ある数物系教官と親交を保つて

いたものと推定できる。なお、東京大学関連の雇傭期間は、明治九年六月二十日より、同二十七年三月三十一日までであると、『東京大学百年史資料三』に記載されている。⁽¹⁷⁾ 理学部に就いては、前述のように明治十六年に正式の英語教師としての記載があり、更にその本務である予備門が、明治十八年十月に廃止されて第一高等中学校に移行するのであるが、同年十月十九日、コックスは理科大学の英語教師を嘱託されたことが記録されている。⁽¹⁹⁾ これは、当時、理科大学学生の大部分の英語能力は、欧文書籍を読んだり、海外留学をするためには不十分なものであり、正規授業、もしくはそれに近い形で、外国人教師による語学授業が平行されていたと推定できる史実である。⁽²⁰⁾

従って、本務を第一高等中学校とした後も、丁度予科と本科のように縦の連続関係も有って、引き続き理科大学の学生の英語教育を、ある期間担当したことを示して居り、何れにしても「古写真」中の殆んどすべての人達と教育上の親交があり、更にノットとは同じ英国人として、特別な交友があったものと推定される。従って、ノット帰国に際しての理科大学の歓送の会に、第一に呼ばれる外国人教師の立場を持った筈である。以上によって、この人物をコックスと結論して話を進めることにしたい。なお、コックス氏の二人の子息も、わが国の英語教育に献身し、その一人ポール・コックス氏は、七十七年の生涯のほとんどを日本で送り、昭和十六年、両親も弟もわが国の土となってひとりぼっちであり、日本がたまらなく好きで、日本残留を泣いて政府に頼んだにも拘わらず、太平洋戦争開始に伴う強制送還の身となり、豪州行きの船に乗せられ、「アバヨマタクルヨ」という有名な言葉

を残したまま、栄養失調のため熱帯洋上航海中死亡したと記録される。⁽²¹⁾

コックス確認のための努力は、昭和六十一年の夏期、筆者がいくつかの物理学関係国際会議に出席した際も続けられた。オックス・フォード大学所属の一英国人物理学者は、コックスの晩年の写真と「古写真」中の人物とを照合し、この二人の人物が、同一人物である可能性は人相的には十分であるが、ただ「古写真」中の人物がコックスであった場合、推定年齢四十七歳にしては、「古写真」中の人物は若く見え過ぎるとの事であった。又オックスフォード関係学校の校長ということであれば、写真の保存がある筈ということで、コピーを持参して貰ったが、その後返事はない。百二十年以上昔ということであるから、英国と云えども容易に追跡できないであろうことは予期されたことである。従って、コックス氏同定は成立したものと結論する。

六、寺尾寿教授、三輪桓一郎助教、仏語物理学科の流れ

さて、コックスと同列で、和装で帽子をかぶった人物と、同列左端の人物の同定は当初難行した。その時点までに、この時の出席者は、当時いわゆる数物連と称した数学、星学、物理学を専門とする人達であることが明確化して居た。物理学、数学、星学関係で、当時の理科大学の職員録中、未同定であった人達の名前は、物理学教授北尾次郎、田中館愛橋、数学助教三輪桓一郎、簡易講習科数学授業補助嘱

託・講師沢田吾一、星学教授寺尾寿、星学講師海軍教授芦野敬三郎であった。又、私の手許には、理科大学の卒業生と教員の記念写真などが、明治年間だけでも三十数枚集められていたが、それにも拘わらず、この二人の同定の決め手に欠けたのである。なお、田中館は特徴のある容貌で、かつ海外留学中であり、前述のように翌七月に帰国するのであって無関係である。多くの資料を綿密に分析して先づ結論したことは、和装の人物は星学教授寺尾寿であろうということであり、又、それよりは若干確実度が落ちるが、左端の人物は数学教授三輪桓一郎ではないかということである。この同定作業は、前記三十数枚の写真に現れる人達の人物同定作業と平行して行われねばならない困難な面があった。寺尾に就いては、明治二十二年と二十六年、二十八年などに顔写真があったが、重要な相違点として、これらの顔写真では、鼻の下にチヨボ髭が生えて居たのである。ところが、理学部事務室に現存する履歴書から、寺尾教授は明治二十四年五月六日、罰俸三十六分ノ一に科せられていることが判った。理由は彼の作成した明治二十四年の暦原稿中に、五月二十四日の月食を脱漏したことであって、理学部の教授として、有り得る過失である。しかしながら、そういう事情があれば、六月十八日の時点で、謹慎の意を表するため髭を剃り落していたことが考えられる。顔と耳の輪かくが微妙に一致し、背の高いこと、明治二十六年理科大学卒業記念写真と同三十四年小石川植物園で開かれた菊池・山川新旧総長送迎会に和装で出席し、和装好みの点のあること、星学若手平山信の前に居ること、酒井の前で菊池の真後ろに立ち、教授相当の立場を示していること、同日藤沢が撮

影し、教官は物理学科に限定されていた、前記の今一枚の長岡の遺品写真には出て来ないことなどの諸点が、この人物を寺尾と認定する証拠である。東京大学教授ともあるものが、履歴書や写真のすみずみまで眺め回してと、顰蹙される読者が居られるかも知れないが、現実の同定作業は場合により、そうした詳細に及んで了う。そしてこの事情は、物理学に於て、未知の現象が観測されたとき、その観測が、単なる装置の誤動作ではないか、もしそうでない場合、その新しい機構は何か、などを探索する研究活動と、本質において違わないというのが、筆者の持った実感である。こうして寺尾教授が確認された。三輪と考えた人物に就いては、当初二つの因子が同定を妨げた。一つは長岡遺品の中に、明治二十九年二月ベルリンで撮影された写真があり、その中に、長岡が「三輪」と記入した人物が居て、その顔かたちと眼鏡などの点は、「写真」の人物と略々合致したが、背丈が、長岡の「三輪」の方が、稍大きく思えたのである。今一つは理学部植物学教室教授小倉謙編による『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』の中に、明治二十八年七月理科大学卒業記念写真があり、その中で三輪助教授と記名されている写真とは余りにも違っていたことであつた。この本は昭和十五年に発行され、写真中の人物は、すべて学生に至るまで記名されていたので、信頼度の十分に高い文献と思われていた。従つて以上はいずれも根拠ある反証と考えられた。

さて、第一の問題点は史実によつて、簡単な結末となつた。それは三輪桓一郎の最初の洋行は明治三十六年（一九〇三）六月であり、明治二十九年二月の時点でベルリンには居なかつたことが明確化したの

(24)である。従って長岡が「三輪」と記名したベルリンの人物は三輪桓一郎氏ではなく、別人の三輪である。容貌が多少「写真」の人物と似ている点興味が出るが、本稿ではそれ以上追跡しない。なお、問題の人物の背の高さの推定に就いては、「写真」のカメラの位置が、中央ではなく、右寄りで、略々藤沢利喜太郎教授の正面にあることが指摘される。その結果として、柱の高さで見られるように、左程背丈が短かく撮影される。外山が山川よりも大きいのは、外山が、日本人には珍しい位大きかった結果であって、外山と山川を一緒に並べると、山川は遙かに小さいのである。又寺尾は大森同様背の高い方であって、従って問題の人物はそれらに比して小柄ではあるが、藤沢などに比して、それ程低くない背丈ではないかと推定される。これらは前記撮影者バルトンの撮影技術とも関連し、同定の際の注意事項となるものである。

次に第二の問題点は複雑な経過を辿ることになった。先ずこの課題も又前記酒井と北尾の同定上の問題点と全く同様の錯綜を孕むことが次第に明らかになって来た。そして、多くの傍証から、遂に筆者は、小倉謙教授の同定に過まりがあり、三輪助教と記名された写真は、神保小虎地質学助教であろうと結論することになった。(25)

先ず第一にこの神保氏に關係する誤まりの発生には、筆者等も苦い経験を既に持って居たことが指摘される。それは、こうした同定の為に、不可避免的に必要な整理作業として、前記の多数の写真内人物の同定を行ったのであるが、その過程中、明治三十五年、三十七年の卒業記念写真の教官の中に、恰幅かっさくがよく、スマートで堂々とした紳士一人

の同定に難行し、長岡の遺品に対する前記坪井誠太郎名誉教授の同定の記録を知って初めてそれが神保小虎教授であることを確認した。実は百年史編集室所有の明治三十三年の東京帝国大学写真集の中に、神保小虎氏の顔写真があるが、痩せ気味で、今思えば丸刈りの顔写真であって、前記人物とは余りにも違って居り、更に明治二十七年二月、長岡と共にベルリンで撮影された神保氏の姿が、同じく痩せ型、丸刈りに近く見える容貌を再確認して居たという、極めて誤解を誘発し易い資料事実が存在したのであった。神保小虎氏は明治二十七年十月、欧州留学より帰国し、十一月に理科大学地質学助教教授に就任、更に二十九年には二十九歳で地質学教授に昇格する。これは異例の昇進である。又言えることは前記二十七年二月から、明治三十四年までの間に、短髪より長髪に、又髭なしから髭ありに、更に痩せ型から小太りの堂々たる体格に変身しているのである。結果として、この容貌上の突然の大きい変化が、明治二十七年二月から、二十八年七月までの、帰朝前後、異例の昇進過程に発生したものと推定すると、すべての「つじつま」が合う。従って、そう滅多には起こらない、こうした個人的な特別な事実の発生に関して、小倉氏が、私共が初期に犯したのと同一の過まりを犯したのではないかと推定されたのである。

解明された複雑な資料の錯綜状況をこれから説明する。先ず明治二十八年の卒業写真中の人物が、三輪桓一郎では有り得ないことを説明する。理学部の人事記録による三輪氏は、明治二十六年九月まで、理科大学数学助教教授を兼任し、職員表に記載されるが、本務は学習院大学教授であって、明治二十六年以降は理科大学職員表から姿を消す。

なお、学習院大学人事記録に「明治二十七年九月帝国大学講師を嘱託す。」とあるが、これは工科大学（工学部）講師である。²⁴従って小倉氏の理科大学教官三輪助教教授は、本学の人事記録にある三輪桓一郎氏ではあり得ない。

公式的には以上のようなようであるが、酒井、北尾氏の場合と同様、この場合にも、発見された三輪桓一郎氏後年の写真は、前記明治二十八年の問題の人物の写真と極めて類似し、堂々たる恰幅ある容姿であって、小倉教授が間違つたとしても当然と思えるものであった。又、三輪氏がもとと理学部助教教授を兼任した事実がある以上、完全に否定するためには、前記人物を明確に三輪氏以外に同定しなければならぬと考えられた。

さて問題の人物の明治二十八年前後の容貌に就いて、前記小倉氏の卒業記念写真は、印刷された本の中の半頁の図版でしかなく、その原写真は現在まで入手できず、鮮明度に大きい問題があった。又地質学教官である神保氏の特徴として、野外出張が多かつたものと推定され、明治三十四年以前で神保氏の入った卒業写真は入手出来なかつた。ところが、長岡の遺品写真の中に、極めて古い今一枚の理科大学教官及び学生の記念写真があり、教官はすべて礼装で、学生は紋つき袴が多く、又厚着で、冬期と考えられ中央に坐つた菊池大麓を囲む形式で撮影されて居て、そこに小倉氏の明治二十八年の卒業写真中の問題の人物が、明らかに同席して居ることが発見された。この写真は極めて鮮明で、耳の下が、直角に近く写真に映る神保氏の特徴と、富士額である頭髮の生え際（まきば）の特徴が、いずれも写真上で確認できる。菊池大麓の

理科大学の履歴を調べると、理科大学の教官として常に頂点を走り、山川がその後ろに続く。明治二十三年十一月に藍綬褒章、明治二十九年一月に正四位、同三月に勲三等旭日中綬章を授与され、明治三十一年五月に東京大学総長に就任して理科大学を離れる。（明治三十一年が上限になる。）

さて、問題の写真はその教官の中に横山教授（明治二十三年就任）、田中館教授が居るから、この集まりは明治二十四年以降と推定され、明治二十九年新春の叙勲に伴うものと考えたと、教官の年齢と時期推定が、ピッタリと合う。長岡の居ない点も（在外）、問題の人物が明治二十八年七月の卒業写真に現れることも合致する。そう考えた上で、その年代での未同定の教授・助教教授は、飯島・松村・坪井・耕和・平山・三好・神保・長岡・鶴田・池田であつて、神保を除く他のすべての教官の容貌はその特徴が明瞭で同定される可能性がない。従つてこの時点で、問題の人物は神保小虎助教教授であると確信することになった。

なお、前記明治二十八年卒業の写真で、神保は新任の助教教授であるが、教官の第二列の中央に坐り、又長岡の写真では菊池の左横二人目に坐り、右は数学教授藤沢利喜太郎、左は物理学教授山川健次郎である。後者の場合は、菊池より年上の山川は複雑な心境であつたと推定されるが、神保氏は異色の人物であつて、²⁷²⁸長岡など数物系の教官とも親交があるほか、軍関係などもあるつながりがあつたように見受けられる。従つて、数物系教官に近い位置を占めて、三輪と誤解される原因を作つたようにも判断される。なお、以上の解析と関係する事項

として、神保氏は日清戦争直後である明治二十八年六月十九日に、占領地旅行取調べを嘱されているから、もし七月十日に日本に居ない事が明確化すると問題は複雑化するが、占領地が韓国を意味するものと推定すると、二十日間の期間があり、十分に行って帰ることが出来たと結論する。

さて第二の問題点が以上で結着したとして、再び問題の「古写真」の第三列左端の人物の同定に移る。既に述べたように、第一級の礼装で参列する可能性のある人物として残って居るのは、前記北尾次郎教授と、学習院大学教授であり、理科大学兼任数学助教である三輪桓一郎と、海軍教授であり星学講師を兼任する芦野敬三郎である。北尾次郎に就いては、その唯一の顔写真が酒井と間違った位特徴ある髭づらであることと、更に前述の、「古写真」と同日に撮影された、それに出る教官が物理学科に限られる、長岡の今一枚の写真に現れないという二点で、一応否定される。芦野は明治二十六年の卒業写真で、前列左端に、海軍軍服様の服装で写っている人物であると推定すると、三輪桓一郎だけが残る。⁽²⁹⁾この人物の口と髭、眉毛と額の特徴は、晩年の小太りした三輪桓一郎氏の特徴と十分に一致し、理学部の人類学者植原和郎教授が保証できると言明された状況であることが追記される。但し、晩年の写真は眼鏡を掛けて居らず、又カイゼル髭を蓄えている。なお、三輪氏の背丈に対する情報は入手されて居ない。

以上の事実によって、「古写真」第三列左端の人物は、兼任数学助教、三輪桓一郎と結論して話を進める。三輪氏の場合も又、確定すれば前記酒井佐保氏、コックス氏等と同様、三十歳の三輪氏の写真と

して貴重な資料となるであろう。三輪桓一郎氏は明治十三年七月、前記仏語物理学科最後の卒業生として出た八名中の一人（首席、当時は卒業生名簿は成績順で記載される厳しい社会であった）であって、物理学でなく数学によって、わが国の数学、とくに数学教育に貢献した人であった。同列右に立つ寺尾寿教授は、仏語物理学科第一回卒業生五名中の一人（同じく首席）であって、明治十一年十二月に卒業し、もちろん先輩、後輩の仲にあり、前記東京物理学講習所の設立に協力し、従って、「古写真」中にも、その親密な関係の伺える位置に立っていると推定されたのである。

以上によって「古写真」中の主要な教官に対する人物同定は終了したものと考えられる。従来状況より前進した部分は、コックス、酒井佐保、寺尾寿、三輪桓一郎の諸氏の同定である。なお既に本文中で紹介したように、残った学生諸君等についても、一応のローマ字名による同定などがあり、殆んど全員に近い確認が可能な状況にあるが、それを記録に残すためには、更に尨大な解析と時間が必要で、本稿の記述はそこまでは延長させないことにする。⁽³⁰⁾

七、おわりに一言、歴史から汲み取る教訓と東京大学

アーカイヴズへの支持

さて、私の専門はもちろん物理学である。しかし、以上のように、はからずも理学部、更に東京大学の百年史に詳しくなる事情が生じた。しかし人間は実に不思議な、且つ複雑な存在であって、科学者の

歴史に詳しくなることが、その自身の物理学を推進させる上でも、殆んど直接的と言える程、重要且つ強力な支持になるといふような状況が、現実が発生した。本稿はその場所でないので詳しくは説明できないが、電子の古典像を円形永久電流とする筆者の一九七四年の提案を基礎の一部として、量子物理学と古典物理学を統合した新統一体系物理学を建設してゆく過程に於て、学界より非常な抵抗が発生したが、その際従来の常識を破棄して、新しい常識を創設してゆく場合に、古来世界的に繰返されて来た科学史の教訓が大変役に立ったという事情である。⁽³¹⁾⁽³²⁾ こうした状況を踏まえて、丁度第二次世界大戦の不幸が、

我が国に取って、今日の繁栄の基礎を形成したように、東京大学百年史を通じて得た人間社会の葛藤や、わが国の社会構造の詳細が、読者の方々に取っても、又人類の将来にとっても、価値ある新しい創造を産むための、貴重な糧の一つになることを期待する。

そうした観点から、先ず筆者が、この「古写真」説明から得られたものを概観し、現下の国内、国外状況と絡めた上で、東京大学アーカイヴズ設立への希望を述べることにする。

さて、当時の理科大学の数物連の状況を、ノット、コックス、北尾などに就いて、それぞれの履歴と家族構成を含めて理解し、更に外山、菊池、山川、寺尾などを加えて眺めると、それは現時点で見ても国際色豊かな近代的教授団の構成であって、仏語物理学科の流れなど、歴史の歪みを孕みながら、明治初年の前後に始められた我が国近代化の努力は、明治二十四年には、我が国の最高学府である帝国大学の一角に、その頂点を極めた人達を持つ状況が既に存在したというよ

うに理解できる。

次に、「古写真」の中に、山川、菊池、藤沢、寺尾各理学部数物系教授の存在を結論した立場のもとで、北尾次郎が写真の中に見当たらないことには疑問が残る。それはピアノの名手と記せられたドイツ人夫人を持つ北尾夫妻は、通常の常識に従えば、コックス夫妻主催のパーティに何度も招待された筈であろうし、農科大学教授が主務であるとは言っても、理科大学物理学科正規教授を兼任している立場であって、物理学科最後の外国人教師が帰国しようとしているこの記念すべき会に出ない理由が判らないのである。なおこの夕、大学総長、外山文科大長及び理科大学教授助教授および理学士数名は富士見軒に於て送別の宴を開いたと記録されるが、⁽³⁾ の中に北尾が含まれたかどうかは不明である。もちろん、病氣、所用、その他簡単な理由も考えられる。しかしながら、北尾次郎に関しては、既に述べたように肖像写真が極めて少ない他、記録に乏しく、物理学科教授として、正統派と見なされていなかったという事実が感じられる。北尾は明治十六年、十三年の在独生活を終えて帰朝し、同十七年理学部勤務を仰せつかるが、文部省御用掛、続いて東京大学御用掛としてである。翌十八年東京大学教授となるが、十九年には東京山林学校教授、東京農林学校教授になり、理科大学教授は兼任となっている。研究対象が氣象学を含むといった事情もあるけれども、北尾が医学専攻である東校出身であることや、夫人がドイツ人であること、更に才気煥発で数理物理学に傑出していたことなどが、反って反体制的状况を醸成し、封建社会の残渣の強い当時の日本社会の中に微妙な陰影を投じて居たかも知れないとい

う推定が成立する。これらの状況は、程度の差こそあれ、現在でも我が国の多くの学科、教室に見られる一つのパターンであり、国際社会に突入してゆくわが国の今後の方向を定める上で、配慮すべき因子の一つではなからうかと考える。近時フィリッピン(31)のマルコス政権の専横振りが新聞を賑わせたが、これらは一面島国の特徴とも言えるのであって、今少しインテリジェンスの高いレベルで考えると、わが国の状況も又同様であって、学界、政界その他に、各種の組織と法皇的人物の出現し易い土壤があり、正しいけれども、その方針や權威に逆らうことになる主張は、非常な抵抗に遭遇するという一般的パターン(32)が存在する。従って、国際化する世界の中で、世界の人達の信頼を得るためには、こうした因子を、意識して排除する努力を持つことも必要ではなからうか。

ここで、つぎにわが国の現下の状況との関連で一言述べようと思う。さてわが国は、第二次大戦後現在まで、先進国に追いつき追いこせを目標として、すべての政策を物質的能率主義に集中させた嫌いがある。しかし世界最大の債権国に成長した今日、その目標は既に達成されたと言えるのではなからうか。更に、現在は、わが国および世界の歴史の中で、明治初期及び第二次大戦終結直後に匹敵する歴史の転換期であると考えられる立場が成立するように判断する。行革推進と小さい政府が叫ばれた段階は既に過去のものとなり、新しい、未知の、創造の必要な時代に突入しつつかあると言っているのである。

とくに公務員や会社の人員を削減し、能率化した上で、第三次事業の振興による雇傭を計画しなければ、マイクロ・エレクトロニクスの

発展する現下の経済構造下で、失業者の増大は避けられない。我が国で失業者が出なければ、それは単にその「つけ」を外国に回しているだけのことである。そして、国際化した現下の世界状況のもとで、国外と国内の区別は急速に消失しつつあり、外国の苦境は必然的にわが国の苦境となって返って来る。それを結論するロジックスは誠に簡単である。科学技術の進歩の結果として、現在十億の人達の必要とする物資は一億の労働人口で優に生産できる。従って九億の人達に死んで戴いたとする。そうすると残り一億の人達の必要とするものは、今度は一千万人の労働で十分である。従って、九千万人の人達には又死んで戴かねばならぬ。これは明らかに矛盾であり、実行すれば世界人類の秩序は崩れる。内需拡大は贅沢をしろということであり、行革・合理化とベクトルの方向が逆であることを認識しなければならぬ。こうした点を踏まえて、高度能率化社会に繁栄を維持するためには、第三次事業の拡大は不可避と判断する。とくにエネルギーなどの資源を浪費しない第三次事業、ソフトウェア重視の事業の拡大が、望まれる方向の一つである。

現在巷で進行している単純な行革・緊縮財政論議は、こうした第三次事業の振興に関する考慮を欠いている。もっとも一昨年の選挙の際に巷で行われた減税論議は更に低次元で、例えば高額所得者層、低額所得者層、大企業、小企業と別けたとき、どれから今までよりも余計に税金を取って、どれに対して今まで以下にするのが、全く不明瞭であったが、昨今それが明らかになりつつある。毎年予算が膨張する以上、又以下に述べるように膨張させざるを得ない以上、減税と増税

は表裏一体であり、結果として増税すべきことは数学的に疑いようがない。換言すると、より能率的で、より少い人数で、今まで以上の機能の果せる社会構造に向かって努力している以上、新しい第三次産業、事業を振興させなければならないことは必然であり、その中には或る比率で、直接収支勘定を合せることの出来ない事業が必ず含まれる。従って、国家事業の比率は高められなければならないが、そのための税金は、能率化され、より収益の上る大企業と高額所得者層より取るのが、合理的な結論と考えられる。

なお、米国内に於ても、共和党政権は、金持ち・能力者優遇、弱者切り捨て政策により、国民を二分しようとしているとの非難があり、奨学金予算の大幅削減等によって、憎悪に近い反感を持つ人達が増大していることや、あるマイノリティ階層の中に四十パーセントと言った高比率の失業者が発生していることなども、知らねばならない事実である。³²⁾

しかし、もちろん諸外国、米国内やヨーロッパ諸国等、かつての先進国も、またNICS諸国³³⁾も、自由主義経済下で、激しくわが国を追う立場にあることも考慮せねばならない因子であろう。しかしながら、筆者は、世界最大の債権国に成長した現在のわが国の立場として、わが国はその政策、企業経営、科学技術、文化において、フェア・プレ

イを実行すべきであると訴える。われわれは、われわれの能力を信頼しつつ、秀れたものは秀れている、美しいものは美しい、又真理は真理である、それらを、どの国の誰が達成しようと、又発見しようと、それを認め、賞讃し、使用すると共に、論理的・技術的に間違いなく世界の人類が共存共栄できる方策を作成・保持して、全世界を一つの国、一つの民族のように考える方向への努力を行うことが、今後の世界に通用し、且つわが国の利益にも連なる正統な方針ではなからうか。³⁴⁾

さて、本稿の本筋に戻って、我が国はもはや後進国ではなく、先進国である。しかし後進国より出発して先進国に発展したその歴史は、今世界人口の大部分を占める開発途上国の人達に取って、貴重な範例を形成しよう。東京大学百年史編集を機会に、こうした貴重な東京大学の資料・知識が、逸散することのないよう、又必要な場合、参観、閲覧できるよう、しかるべき処置・方策を講ずることは、現時点で必要なことではなからうか。こうした東京大学の歴史に関する資料などの整理、維持、閲覧などの事業は、もちろん直接十分な収入に結びつかないことは確実であるが、世界の人々の尊敬と信頼を得ることに貢献し、世界平和の永続と人類繁栄の保証といった、金額に換算することを許さない絶対的な果実となって、我が国にも還元してくると思料する。もちろん、我が国の青少年の教育にも重大な意義を持つことは間違いのないところである。第一次世界大戦以来、世界のリーダーを以って自他共に認める立場を取って来た米国は、そうした事を既に実行して来たのであって、筆者も戦後米国で多くを学んだ一人であり、又現に、米国の大学院学生の四十パーセント、理工系に限定すると、

その七十パーセントが外国人と言われて居り、これらの外国人学生が不便を感じることはないよう、各種の第三次事業が、大学の内部にも整備されていると理解される。なお、国立科学博物館はその任に耐えるものではない。一例として長岡半太郎教授の遺品の存在は、長岡教授直系の嵯峨根教授の弟子ですら承知して居らず、又当の科学博物館の担当者の人達ですらも、重要な写真の存在位置が判らず、整理を主導した木村東作氏に来て戴いて、やっと埃にまみれた写真の束が、見つけられたという事実がある。国立科学博物館は保管だけをしているのであって、一般の閲覧はもとより、整理も十分には出来る立場にないように見受けられる。考えて見ると、東京大学の資料は東京大学に在るのが当然で、東京大学を訪れる内外人の、少くない人数が、もし、そうしたものが整理されれば、一覽を希望するものと予想する。

我が国の政党が、正確ではあるが、非情である経済・税金政策の内容や、以上に述べたような高い見地に立つ事業を、その政策の争点に掲げることの出来るよう、わが国の知識層、更には一般有権者の知的水準・知的感受力が向上することを希望し、又その結果として近い将来、こうした事業が実行されることを強く期待したい。なお、昭和六十一年の初めに発行された東京大学史紀要第五号で、大学アーカイヴズの設立として、多くの人達の強い賛同のあることを知った。これは誠に心強い盛り上がりであると考ええる。なお、江戸時代の遺跡資料保存ということで、東京大学内の山上会館関連の工事や、理学部四号館の延長工事などが、一年以上に亘ってストップしたなどの学内状況と比較し、東京大学が、東京大学自身の創立発展に関する重要資料を

疎遠にしていることは、如何にもアンバランスであると筆者には思われる。

また、こうした社会科学的施設の設置は、自然科学の大型施設に比し、1%といった僅少な予算で可能に思えることを、実験物理学者の立場で指摘させて戴きたい。⁽³⁵⁾

なお、既に一部言及したことであるが、W・D・コックス、寺尾寿、三輪桓一郎の同定と、神保小虎に関係した錯綜に関する本文の結果の成立性に関して、理学部人類学教室垣原和郎教授による顔写真の判定があり、いずれも可能性の範囲内にあり、少なくとも古い解釈よりは確率度の高いことが確認されていることをここに附記させて戴く。

終わりに、理学部百年史担当の各教室・施設の委員の方々に對しては無論のことであるが、「古写真」を発見、保存、持参戴いた物理学教室山本祐靖教授、資料の提供探索に非常な御協力を戴いた科学史研究者木村東作氏、教官の同定や資料の検索に努力して戴いた東京大学百年史編集室小川千代子氏、更に文献探索に御努力戴いた同じく百年史編集室中野実氏、教養学部図書館参考係堀内昌子氏、本郷大図書館増田幸子氏、その他理学部事務室の人達等、御協力戴いた方々に厚く感謝させて戴いて筆を措きたい。

註及び文献

(1) 『長岡半太郎伝』 板倉聖宣・木村東作・八木江里著、朝日新聞社、昭和四十八年。

(2) 明治十年東京大学の発足と共に法学部・理学部・文学部・医学部が設

立されたが、明治十九年、それらはそれぞれ法科大学・理科大学・文科大学・医科大学と名称を変え、工科大学も発足して、全体を帝国大学と称した。明治二十三年農科大学が設置され、明治三十年京都帝国大学の発足と共に東京帝国大学と改称され、大正八年、各分科大学は法学部・医学部・工学部・文学部・理学部・農学部と改称され、新たに経済学部が加わって、現在に続く学部の名称が成立した。(4)

(3) 『東洋学藝雑誌』、一一七号、明治二十四年六月発行の三一〇頁に、この写真が、工科大学教師バルトンによって撮影されたという記事がある。この写真の人物の立ち方と、撮影者の位置関係など、当時としては高度な配慮の存在が感じられる。ピントその他に関しても、この年代の我が国に於ける写真としては第一級の技術が使用されたと判断される。なお明治二十二年のバルトンの顔写真が現存する。(13)

(4) 『東京大学百年史資料三』、五頁―九頁。

(5) 英国は、イレヴンプラス・ユグザミネーションに象徴されるように、法律と差別を尊重して大英帝国を作った歴史があると筆者は理解する。U・K・内での順序はイングリッシュ、スコッチ、アイリッシュであると判断される。

(6) 菊池と山川の顕著な履歴上の差は、近代的な教育の存在しなかった慶応・明治初期の我が国の状況のもとで、菊池の渡英は十一歳の若年であるが、山川の渡米は十七歳である。こうした事情で、山川の物理学は外人教師が教授として認めるレベルでなかったように推定される。

(7) 『東京帝国大学』、編者 小川一真 明治三十三年四月発行、小川写真製版所、七―八枚目。

(8) 『六校寮史』 第六高等学校生徒寮編集兼発行。大正十四年五月。冒頭挿入写真二頁目。

(9) 『六校外史』、田中民人、森田義明編集、財界評論社発行、昭和四十年十一月、第四頁。

(10) 『明治過去帳』、大植四郎編著、東京美術発行、昭和四十六年新訂版発行(旧版昭和十年発行)

一枚の古写真から

(11) 記入者に関するこの解釈には『長岡半太郎伝』の著者の一人で、明治年間を担当した板倉聖宣氏にも異存がなく、長岡半太郎氏の御子息による可能性が高いとの考え方を得た。御子息の場合、長岡半太郎より若い学生の人達などは同定の可能性が高いが、北尾次郎も、酒井佐保も、それらの記録写真で照合する以外に、直接同定は出来無かった可能性がある。又第三及び第六高等学校に記録の残った酒井と異なり、北尾の顔写真は甚だ稀で、もしかすると、記入者は北尾の顔写真を知らなかった可能性も予想した。

(12) 学習院は周知の名門校で、明治初年に活躍した家系の子が、昭和代でも数多く入学するという事実があるように思われる。

(13) 明治二十二年十一月三日、立太子の式典に際して撮影されたと推定される東京大学全教員の写真(含職員。『百年史部局史』)、理学部の筆頭写真(長岡半太郎遺品)。この中に本「古写真」の撮影者バルトン教授(工科大学)が見られ、従って問題の人物がバルトン教授ではないことが確認された。

(14) 『近代文学研究叢書』、第八巻、昭和女子大学編。冒頭写真と一七八頁。
(15) 第一高等学校となった際、同様に第二、第三、第四、第五高等学校が設立されたが、帝国大学の入学定員は、これら高等学校の全卒業生を収容できる人数であった。又生徒区分も法律科、政治科、文科、工科、理科、医科、工・理科と言った形(更に語学の別に加わる場合もある)に別れて、実質的な教養学部の形態を保持した。なお、京都帝国大学の設立は明治三十年である。

(16) 文献(14)、一八三頁。

(17) 『東京大学百年史資料三』、二六一頁、当然のことながら、コックスは文学部に講師の籍を長く持ち、また明治二十三年駒場農学校が農科大学として東京大学に編入された際(4)、その筆頭英語教師を兼動した。

(18) 『東京大学法理文三学部一覽』、自明治十六年至同十七年、二二―二一頁。

(19) 『東京帝国大学五十年史』、上冊、六八―四頁。

(20) 『東京大学第三年報』、自明治十五年至明治十六年』に於て、コックス

は法学部、理学部、文学部の第一学年の英文学授業を担当し、理学部では唯一の外国人英文学教師である。それ以降は理学部の語学の正規授業表に英語が無くなり、独語が、第一年及び第二年に現れるが、それも明治二十四年以降は無くなる。ただし、明治二十四年に農科大学（農学部）が発足し、コックスはそこで正規の英語講師として職員録に記録されてゆく。農科大学は北尾が物理学を教えて居り、理学部との距離の短かったことを窺わせる。

(21) わが国の英語教育に献身したコックス親子三人を記念して、昭和三十二年八王子市外に慰霊碑が建てられた(14)。なお、この人物がコックスと確定した場合、この年代のコックス氏の写真として唯一の貴重な写真資料になる可能性がある。

(22) 文献(1)一八一頁の写真。

(23) 『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』、小倉謙編、東京帝国大学理学部植物学教室発行、昭和十五年九月、五十二頁と五十三頁の間の挿入写真。

(24) 『東京理科大学百年史』、東京理科大学発行、昭和五十六年。一一二頁。なお、学士会月報には、当時委員としての三輪桓一郎氏の月毎の記録がある。

(25) 実際の確認の順序は複雑で、三輪氏の同定作業に伴い、神保・三輪の同定上の錯綜が先づ明らかとなり、次いで、北尾と酒井の錯綜が絡んだ。しかし記述は単純化して、酒井の確認を先づ説明し、次いで神保・三輪とした。

(26) 資料(24)の冒頭写真中、創立者・維持員として三輪桓一郎氏の晩年の顔写真がある。

(27) 偶然かもしれないが、小倉氏の『植物学教室沿革』中に選ばれている明治二十八年、明治三十年、明治三十九年の理科大学卒業生・教官写真の中には、本文中で述べた明治二十八年の問題点を除いて、神保小虎氏が入っていない。しかし、神保教授は大正十三年一月十八日現役で急死しているが、小倉氏の植物学入学は大正五年九月である。従って小倉氏と神保教

授は面識を持つ可能性もあった程度の時代差と考えられ、小倉氏が『植物学教室沿革』を出版した昭和十五年の時点では、神保教授の顔写真に就いて、誰かは面識を持って居た筈であると推定できる。従って、何か割り切れないものが残る。もしかすると単純な誤記か、あるいは植物学教室と地質・鉱物学教室との間の何等かの人間関係の存在によるのかといった疑問も出る。更に、こうした事実と無関係でないと私には思われる一つの新しい事実が判った。それは神保氏は当時ベルリンで有名な「いたずら」好きの悪童であって、日本人留学生がエイプリル・フールの四月一日に、独逸政府のベルリン追放令状到着という思い切った「しっぺ返し」を実行したことが、長岡半太郎の随筆集に記録される(28)。従って、東京大学理学部でも、神保氏の没後ではあるが、誰かが、「しっぺ返し」をもくろんだという仮説も、小さいが、零でない確率で存在できよう。

(28) 『随筆』、長岡半太郎著、昭和十一年、改造社、五二八―五五五頁

(29) 芦野氏と推定した人物の鼻と髭の特徴は、三輪氏を推定した「古写真」中の人物の鼻の特徴及び後年の三輪氏の鼻と髭の特徴とは一致しない。

(30) 長岡遺品に含まれる同日撮影された今一枚の写真のローマ字同定より推定される未同定者の姓名は、数学科二年生松井喜三郎、同一年生内田雄太郎、物理学科大学院生木村駿吉、同二年生太田久太郎、太田達人、同一年生岩国保作、岡三治郎、氏家謙曹、遠藤又蔵、同選科生保坂丑太郎である。なお、オーサカを大島とすると物理学科一年生大島英助となる。他にカシオーという未同定の名称がある。更に、同定者と以上の名称の人物の外に、二名未同定者があり、数学もしくはは星学関係の研究生もしくはは職員と思われる。

(31) 学内広報No.五〇〇(一九八〇)二〇―二三頁。

(32) 飯田修一、「フュライト研究から新統一体系物理学樹立に至るまで」、『統・独創』(一九八〇)東北大学半導体研究振興会発行。二九―八四頁。

(33) Newly Industrialized Countries、韓国、台湾、香港、シンガポール等アジアの新興工業国。

(34) 米国は教育水準と社会意識に非常な隔差のある多数の国民を持っている

るという歴史的、地理学的条件の結果として、国民の生活水準、教育方法に、非常な隔差が存在しても止むを得ないとする政策を實行していると思われる節がある。英国、西独等は制度的にも国民の間に明瞭な隔差の存在を強制している。しかし、幸いわが国は島国であり、明治維新以来の先人の努力の結果として、米国や世界に比し、遙かに一様な教育程度を持つ国民によって構成されているという事情がある。この構造は現在の欧米に存在しないユニークなものであって、戦後以来の日本の非常な経済成長は、工場労働者の質の高いことや、多様性のある企業構成など、この本質的な構造差に依存している点が大きいと結論する。従って、わが国の政策は、この点に関して、明瞭に米国と異なすべきであると考え。又人類規模で考えた時、いまや地球は有限の土地と有限の資源を持つ島国と化しつつあると考えられ、従って、地球全体としてもわが国の姿に近接することが、その最終ゴールではなからうか。

(35) 東京大学アーカイヴズを、教養学部図書館内に置くという構想があるように聞いている。東京大学教養学部図書館の近くには元一高関係古文書、書籍、更に資料室などが置かれている。しかし、訪れる人は極めて少数で、且つ大図書館などの実質的な連携が出来ないから、東京大学内で必要な資料収集活動を行った後、止むを得ず、教養学部図書館にしかない資料に関して駒場に足を運ぶというのが実状であらう。従って、東京大学として、その百年の歴史資料を、なるべく公開したくなくクッションを置きたい場合には駒場に、又、参観者、閲覧者の便宜を考えて、なるべく多く利用して戴きたい場合には、本郷に置くべきであるように判断される。筆者は結論として、専門学部活動が百年史の主体になる以上、又、公開の趣旨に就いて、後者を取り、本郷に置かれるべきものと考え。その際、現在各学部で保存されている東京大学資料の一部は、其処に保管されるのが適当であらう。

(いいだ しゅういち 名誉教授、前理学部百年史編纂委員長)